

第 35 回 令和 7 年 6 月 4 日 (水)

いよいよ体育祭が近づいてきました。本番の日のお天気は大丈夫そうですね。(ちょっと良すぎるのでくれぐれも熱中症に注意してください。)私にとっては川和の体育祭初めてなのでとても楽しみにしています。

「東大の現代文」という東京大学の現代文の過去問から学ぼうというテーマの文庫本を読んでいるのですが、その中に信長が桶狭間の戦いに臨む直前に「敦盛」を舞ったという話が出てきます。この「敦盛」は人生の儚さを謡っていると書いてありました。

「人生の儚さ」について若いみなさんだとあまり実感ができないかもしれません。人生は短いと言いますが、お年寄りで長く生きてきた方も同じお気持ちなのでしょうか。

時間には「未来・現在・過去」の 3 種類あります。お年寄りは過去が 70 年、80 年あるわけですが、過去というのは鍋のようなもので、一つの塊だと思ってください。若い人もお年寄りもすべて一つの鍋で、お年寄りはその鍋の中の「具」が若い人より多い状態です。お年寄りの過去が生きてきた年月分だけ膨大にあるわけではありません。

物事の記憶が難しくなってくるとさらに鍋は小さくなります。断片的な記憶だけが時折脳裏をよぎります。お年寄りだから「過去」という時間をたくさん持っているわけではありません。

次に「未来」はどれくらいあるのか、これは万人に共通して「わかりません。」若い人でもいつまで寿命があるのかはわかりません。私自身必ず明日があるという保証はありません。

「未来・現在・過去」のなかで必ず存在して、健康な限り自分でコントロールできる時間は現在だけです。「現在」は年齢に関係なく平等で、0 歳の赤ちゃんも 90 歳の老人も同じ 1 秒を同時に体験することができます。

結論は私たちが何とかできるのは「今」だけだから、それを大切に生きることが大事であるということ。ところが貴重な「今」を退屈だからとスマホで無駄遣いしたり、未来に不安を感じて怯えていたり、変えようのない過去を悔やんでいたたりする人間がとても多いのが現実です。

半分のコップの水を見て「もう半分しかない」と思うタイプの人があります。私もそうなのですが、人生は儚く未来はわかりません。もしかしたら半分も必要ないのかもしれない。だからこそ今を大切に、半分ある水を価値あることに使おうと考えてほしいと思います。